

3 講演録

「今の子どもたちは何を読んでいるのか」

児童文学評論家 赤木かん子



今から20年ほど前になりますが、私の住んでいる地域の小学校の先生と知り合いになり、「学区に住んでいるからPTAよね！うちの学校図書館を見て。」と頼まれました。それで見に行ったところ、「どう？」「うーん……。」「じゃ、直して。」と言われ、初めて学校図書館のことを考え始めました。

そうして、100年も学校図書館をやっているのだから、何処かにやり方を書いてある本があるだろうと思い、探しに行ったのですが、読んでみて愕然としたことに、どの本も間違いだらけでした。なぜかと考えてみたら、それはみんな、“先生”が書いたもので、司書が書いたものではなかったのです。司書と教諭は、目的は同じ仕事をしているのですが、大工と左官屋くらい、やっている仕事は違います。私が教師の仕事について書いたら、先生から見たら間違いだらけになるに決まっています。そりゃ、異業種のことを書いたら間違ふよね。というわけで、自分で考えるしかないのか!?ということにたどり着くまで3ヶ月ほどかかり、それも結構なショックでした。だって、つまり、それまで学校図書館はほぼ作られていなかった、ということですから。

そうして本腰を入れて取り掛かったら、「先生方と話が通じない事件」が起こりました。先生方の言うことが私には分からない、私の言うことは先生方には通じないのです。それで、これはどこかで情報が入れ違っているに違いないと思い、どこがずれているのかを探しにかかりました。結局、分かるのに1年半かかりましたが、分かったのは、この人たちは“本は文学、物語だ”と思っている、ということでした。“読書をする”ということは、“物語を読むこと”。だから、“読書指導をする”というのは“物語を読むように仕向ける”ということだったのです。驚天動地でした。司書なら誰もがぎょっとすると思います。まさかそんなはずはない、と思いましたが、文科省そのものが(昔は、ですが)“図鑑を読んでいたら、長い物語を読むように指導しましょう”といていたのです。調べ学習、アクティブラーニング、探究、で使う本は物語ではありません。ですからいまの小学校にも、調べるのに使う本はたくさんあるのに、それは“本”だと思われてなかったわけです。

というわけで、次はこれをどうやったら納得してもらえるかを考え始めました。それで、思いついたのは“いまの学校図書館と公共図書館は、NDC(日本十進分類法)という分類法を採用しています。これは0から9までの10個の数字を使って本を分類するやり方で、文学に当てられているのは9です。つまり、そのほかの0か8までの、全体の十分の9は文学以外の本なのです。図書館というのは、文学以外の本のほうが圧倒的に多いのです”という小話でした。

例えば、現代の小説には“913”という数字がついていて、これは、きゅう一、いち、さん、と読みますが、それは、きゅうひゃくじゅうさん番目、ではなく、9は文学、1は日本語、3は小説、を意味する記号です。つまり、913は“日本語で書かれた小説”という言葉に数字に置き換えた記号なのです。ちなみに、覚えなくてもいいですが、0は総合、総記、ここには図書館学、コンピューター、郷土も入っています。1は、心理学、哲学、神学。2は歴史、伝記、地理。3は社会学。4は自然科学。5は工業。6は産業。7は芸術・スポーツ。8は言語学。9は文学となっています。

というわけで、文学だけが本ではありません。例えば、医学の本は文学ではありません。工業や産業の本も文学ではありません。美術や音楽も文学ではありません。心理学も歴史も伝記も文学ではありません。政治も法律も文学ではない。つまり、図書館はこれらの本の方が、分量的に多いのです。という話をしたら先生方にも納得していただけて、私の話が通じるようになりました。

図書館というのは、「図」と「書」と書きます。つまり、絵も図書館の範疇はんちゆうに入るので、小学校の3年生までは図鑑を読むのがメインになります。なぜかという、言語習得期だからです。新しい言語を習得するとき、どこから始めるかという、文法と単語の習得から始めます。新しい単語を覚えるにはどうすればいいか。短い文章の中で、知らない言葉がたった一つだけ出ている文章を読むと、新しい言葉を手に入れることができます。

例えば、この『太陽系探検』(出版社:大日本絵画)というのは、太陽系に関する飛び出すしかけ絵本で、あまり宇宙に興味のない人でも「へえ！」と思ってもらえる画期的な本です。この最初の一行は「プロミネンスは太陽の表面から飛び上がる巨大なガスの炎のことです。」で始まります。この説明がこのページのどこかにあるわけですが、この一行の中で分からない言葉は「プロミネンス」だけです。これを読むと“プロミネンスというのは、太陽の表面から立ち上がる巨大なガスの炎のこと”なんだなというふうに思えます。そうしたら他の本で、プロミネンスという言葉が出てきたときにも、プロミネンスが何かということはもう分かっているわけですから、読んで意味が分かるようになります。

言語を習得するときは、知らない言葉が一つしか出てこない短い文章を読まないとならないのです。この言語習得期の3歳～7歳くらいまでの子どもたちは本能的にそれを知っていて、図鑑を好みます。図鑑を読むことで語彙を豊富に手に入れることができるからです。

物語を読むと語彙が増えると思われているようですが、物語を読んでも語彙は増えません。なぜかという、現代文学というのは、私たちが知っている言葉だけで、できているからです。だから、今の小学生に一番読めないジャンルは何かという、とりものちよう捕物帳です。江戸時代の風物がたくさん盛り込まれている捕物帳は、見開き1枚の中に知らない単語が40個ぐらいあります。きゃはん脚絆、てっこう手甲、ひのし火熨斗、きせる煙管、どてら襦袢……。捕物帳や江戸時代や明治時代の本を読めるということは、かなり豊富にバックヤードの単

語を知っていないとならないのです。例えば、天水桶てんすいおけと言われて、軒下にある雨水をためる大きい桶だということ知っていないとその世界には入れません。かつては『水戸黄門』(TVドラマ)がたいそう役に立ってくれました。本を読んで、これは何だろう？と思ってテレビを見ると、そこに映っていたからです。なので、これか、と理解することができました。でも、時代劇専門チャンネルはありますが、地上波からは『水戸黄門』も『銭形平次』もなくなっていましたので、捕物帳の風物をどこかで見かけるといことは、少なくなってしまったのです。おじいちゃんとおばあちゃんの家にあるという人はまだ分かりますが、そうでない人はそれが何なのか見当がつかなくなります。

というわけで、見開き一枚の中に知らない単語が40も50も入っている本は、子どもたちは読むことができません。本を読んで理解できるということは、その本で使われている単語の7割ぐらゐは習得していないと読めません。ということは、それまでにその単語をどこかで覚えなくてはなりません。が、「プロミネンス」という言葉を日常的に使っているご家庭がどのぐらゐいるのでしょうか。家族でご飯を食べながらそういう単語に出会えることはまずないと思っていいでしょう。では、言葉をどこで手に入れるかという、テレビのニュースか、ネットのニュースか、本の中です。日本で子どもたちにそういう単語を提供しているのはなにかという、学習漫画です。

アメリカにはディズニーがいて、アニメーションが発達しました。でも、日本には手塚治虫てづかおさむがいたので、日本ではストーリー漫画が発達しました。そして、ストーリー漫画の発生物として「学習漫画」というものが生まれました。名探偵コナンの学習漫画は、たいそう優れています。なぜかという、必ず新しい単語が出てくる度に、阿笠博士あがさが出てきて「コナンくん、それはじゃね…」と言って、単語の解説をしてくれるからです。

名探偵コナンの学習漫画の重力の話のところに「物質と物体はすごく似ているけど違うよ。例えば、鉄でできた釘、のうち、鉄は物質、釘は物体なんだ。」という一節がありました。確かにこの二つの単語の区別がつかなかったら、物理の本は読めません。しかし、ほとんどの科学の絵本では、この最初の基礎が抜けます。惑星と恒星の説明なしに、いきなり「太陽が……。」と始まってしまいます。

天文学一つとっても、その中で使われている学術用語は何千語に上ります。それを手に入れないと、天文学の専門書を読むことはできません。そして、5歳から8歳までは言語習得期ですから、その間に、できるだけ大量に学術用語を身につけてもらいたいのです。学術用語というのは、学問をするのに必要な言葉のことです。そして、これは日常生活には存在しません。

日本はアジアの中では、自分の国の言葉でものが考えられるとても特殊な国です。なぜかという、明治時代に、このままでは文化的に日本は列強に乗っ取られると思った森鷗外もりおうがいや大隈重信おおくましのぶや、その他多くの人たちが必死になって、単語を作ってくれたからです。

日本は昔から優秀な翻訳文化がありました。どうしてかという、漢字には一つ一つ意味がある。そこで、その意味をくっつけて、漢字二文字の言葉を新しく造語したわけです。

例えば、実験という言葉は「実際に試してみる」です。観察は、「観」という字を漢字字典で引くと「よく見る、小さいことを見る。細かいことを見る」と書いてあります。「察」は察する。つまり、「分かったこと

を使って考える」という意味です。ということは、観察というのは、「細かい小さいところをよく見て、分かったことを使って考えるということ」だと分かります。

江戸時代にはなくて、現在私たちが使っている言葉があったら、その間に誰かが作ってくれたのです。そのおかげで私たちは今、日本語でものを考え、文章を書き、論文を書けるようになりました。明治時代の方々は、本当に頭がよかった。言語を持たないでヨーロッパに勉強に行き、習得して帰ってきたんですよ。西周は「哲学」という言葉を使わずに、哲学を学んで帰ってきたわけです。そして、日本に帰ってから自分の習ってきたものを、日本語でなんとはいえいいかということを考え「哲(悟)る」「学問」で「哲学」という言葉を造語したのです。すごいですよね。というわけで、学術用語はどうやって意味を調べるのかというと、漢字一文字、一文字の意味を漢字字典で引いて、それをつなげると意味が分かります。そうすることで言葉を作った人がどういうことを考えて、その単語を作ったのかということを追跡することができるのです。

何度もいいますが、小学校の低学年は言語習得期です。人間の脳は、生き延びるのに必要な情報、能力を手に入れてもらいたいと思いますが、その筆頭は言語で、ですから低学年は図鑑が好きなのです。でも、成長期というのは、その一時期が過ぎるとそのような欲求がなくなり、次の段階に移ります。ですから、4年生を過ぎる頃には図鑑には興味がなくなり、男の子は戦国武将に、女の子は恋と友情に走ります。つまり、自分の意思とは関係なしに、社会性、社会学、人間とどうつき合うかという方に興味が向くのです。その段階で、言語習得はおしまいです。ということは、それまでの間(9歳までの間)に、学術用語を大量に取得してもらいたいのです。子どもたちは用語習得用の本を欲しいと言いますし、それを読んで、楽しいと思うのです。

皆さんは何歳までブランコに乗っていましたか。小さい時はブランコが好きだったはずですよ。板切れにまたがって左右に揺れることのどこがそんなに楽しいのかと言われると説明するのは大変難しいです。でも、小さい時は重力に逆らうと楽しいと感じるようにセッティングされているのです。それは、二足歩行をさせるためです。本来人間の体は四足で動くようにできています。でも、両手を自由に使えるようにしたかったのです。だから二足歩行をさせたい。そのためには、快感というエサが必要だったわけです。立ち上がって二本足で歩かせるために、重力に逆らうと楽しいと感じるようにできている。ちいさい子を持ち上げて、揺さぶってやるとすごく喜びます。逆さにしたりしても喜びます。大人はそれをされたら恐怖しか感じないですよ。振り回されることが快感ではなくて恐怖に変わったときに、人は無意識にジェットコースターから降ります。でも、子どもの頃に楽しかったという記憶があるので、自分の子どもたちがジェットコースターに乗りたいといったときには「お母さんはいいから、あなたたちだけで乗っておいで。」ということになります。自分が経験したことがあること、やったことがあることに対して大人は寛容になります。それがどういうふうに楽しいのかが分かっている、悪いことは起きないということが分かっているからです。けれども自分が経験したことがない事柄に対しては、警戒します。

かつて、映画は不良の観るものでした。高校生(旧制中学生)は映画を観るのを禁じられていました。

映画を観るのは不良だと言われ、先生の言うことに逆らって夜な夜なこっそり寮を抜け出して映画を観に行っていなかったら、山田風太郎^{やまだふうたろう}という作家は生まれていないでしょう。ビートルズはかつて不良の音楽でした。今ではクラシックです。風俗や習慣を判断するときには用心をしたほうがいいと私は思っています。今はそうであっても、本質的にはそうではないかもしれない可能性があるからです。私はいつも「昔の水着は足首まであったよね」と思うことにしています。20世紀初めの水着は手首、足首までありました。きっと泳ぎにくかったろうと思いますが、文化というものは、そのぐらい変わっていくのです。だから、自分が正しいと思って言っていることが本当に正しいのかどうかという検証が、大人には常に必要です。

本に関しても同じです。自分が読んでいない本について「これは駄目だ」「これを読んでもいい」ということは、たいそう危険な行為です。大人はなるべく自分の知っている範囲内に子どもを押しさえ込もうとします。しかし、そうしたら、未来の世の中を生きていく子どもを育てることができません。

この話がどこに繋がるのかというと、最初の「本は文学だけじゃない」ということに繋がっていきます。なぜかという、今、文学の力はどん底だからです。変わったのは1995年です。この年にWindows95ができました。コンピューターが一般に普及しました。というわけで、95年以前と以後はコンピューター以前、コンピューター以後に分かれ、文化は変わります。コンピューターは非常に未完成な状態で発売されました。3ヶ月にいったんずつ機種変更が起り、新しいパソコンが次から次に発売され、コンピューターがほぼ完成したのは2004年あたりだと思います。その間にもっと大きい波が来ました。携帯電話です。この二つはやがて2008年にスマホになります。95年に生まれた人たちが今27歳です。今の日本では、27歳から下の人達と27歳から上の人たちは文化が違うのです。文化が違うということはどういうことか。同じ本、同じ音楽、同じファッションを楽しむことができないということになるのです。

イギリスは文化が途切れていないヨーロッパでは唯一の国です。第二次世界大戦の被害を直接被らなかつたからです。イギリスだけが戦場にならなかつたし、移民もたいして来ませんでした。アメリカはヨーロッパからの移民を大量に受け入れたので、その後の30年間は大混乱になりました。でも、イギリスはいまだに女王や王が居て、貴族階級が存在します。

カナダで生まれたハーレクインロマンスは、最初、有産階級のお金持ちのお嬢さんが、リゾートホテルに遊びに行って、自分よりも階級が上の男性と恋愛をするという話でした。その権利をアメリカの会社がい取ると、アメリカは職業婦人の国ですので、アメリカ版のハーレクインロマンスの主人公はみんな職業に就いていて、自分よりもレベルが上の男性と結婚するという話に変わりました。例えば、ヒロインが銀行の副頭取なら、ヒーローは銀行の頭取です。

ハーレクインロマンスは、読者からアンケートをとって、どのような内容が求められているかを捉え、執筆の指南書のようなものを作家に渡します。例えば、ハーレクインロマン殺人事件というミステリーがあるのですが、作家への指南書の中には事細かに、何ページで喧嘩して、何ページで仲直りさせるというように指示が書いてあるのです。「読者の言う通りに作るジャンル」というのは、その内容がいつ

変わったかということ突きとめると、アメリカがいつ変わったかが分かるようになります。くつきりはつきりと何年の何月の第何週からアメリカは変わったということが分かります。つまり、ハーレクインは1冊だけではなく100冊ほど読むと、実に面白いのです。

アガサ・クリスティーは1977年に亡くなるまで19世紀の価値観を持ち続けました。軍人はカッコいい、外国人はうさんくさいと……。イギリスでは世界が変わっていないということですから、おじいさんが子どものころ読んだ話をそのまま孫に読んでやることができます。

日本の児童書、児童文学はイギリスをお手本にしました。イギリスは児童文学大国です。でも、フランスには児童書はほぼ存在しません。なぜかという、フランスでは子どもは早く大人になってほしいというスタンスだからです。しかし、イギリス人は『不思議の国のアリス』のように、子どもの無邪気な遊びを大人になっても喜ぶところがあります。そのようなわけで、児童文学というジャンルはイギリス人の気質とぴったり合い、そこで発達したのです。日本はイギリスをお手本にしたのですが、残念なことに、日本は100年間同じ文化が続く国ではありません。それどころかブチブチブチブチと切られていく国です。この100年は怒涛の100年でした。『ハリー・ポッター』を読んで育ったのは、今27歳から上の人たちです。今や『ハリー・ポッター』は古典です。27歳から下の人達は、『ハリー・ポッター』をほとんど読んでいないと言っていいでしょう。映画が成功したので、当時はテレビで放送される度に子どもたちが図書館にやってきて、「ハリー・ポッターの本がある？」と聞いていました。でも、多分もう日本全国どこでもこの5、6年は、そういう子どもはほぼいなくなったと思います。今の小学生で『ハリー・ポッター』の本を読んだことがある子どもたちは、かなりの物語好きです。現在30代から50代の方たちは、ハリー・ポッターとリアルタイムで出会うことができ、本を読んで面白いと思い、また、当時は、子どもに勧めると子どもにも面白いと言ってもらえた。だから、今でもハリー・ポッターは面白いはずだと思い込んでしまいがちです。でも、『ハリー・ポッター』が読まれなくなって27年も経つのです。1980年代の日本の児童文学から、2023年は、遥かかなたに来てしまいました。

現在の様相は一変しています。コンピューターが生まれて、本の世界も根底からひっくり返されました。コンピューターが生まれたおかげで活版印刷からデータ印刷に変わり、本はたいそう綺麗になりました。美しい図鑑がたくさん作られるようになりました。また、ほとんどの学問のジャンルはひっくり返されました。

1915年にアインシュタインが相対性理論を発表して、近代科学が始まります。それまでは全部が混沌とした博物学でした。その結果、宇宙論に関しては、もう1950年代までに多次元宇宙までほぼ今と同じ形で完成していましたが、それを証明することができませんでした。宇宙は思っていたよりも大きいということが分かったからです。ニュートンは、宇宙というのは太陽系だけだと思っていましたので、ニュートン理論で計算をしていくと、数値がゆがんでしまう。それを是正しようとしたのがアインシュタインです。しかし、人間が計算したら60年はかかるということが分かったので、人間よりももっと早く計算してくれる計算機(コンピューター)を作ることに専念したわけです。人間はたった20年で計算機

を完成させました。そして、パソコンは次から次に答えを出してくれました。目まぐるしく、学説が変わっていきました。自然科学だけでなく、文化人類学も医学も、ほぼすべての学問がひっくり返されたと思います。

皆さんが受けた高等教育、高校3年生のときに習った物理、生物、数学、科学を思い出してください。皆さんが高校3年生のときの西暦は何年でしたか。2004年から2005年以前に高校を卒業された方は、自分が学習した内容が現在ではほぼ間違いになったと思っていいでしょう。自分の頭の中のデータを更新していかないと、答えは間違ってしまう。これは10年前のカーナビが使えないのと同じです。カーナビの更新をしないと、山の中や海の上を走ったりしますよね。

というわけで、学校図書館は大打撃を受けました。なぜかという書架に並んでいる本の大半が使えなくなったからです。例えば自然科学は、それぞれの学会が否定してしまった学説は学校図書館に置いておくことができません。恐竜の本は「羽毛恐竜」が載ってなかったら廃棄です。宇宙の本は「冥王星が惑星」と書いてあったら廃棄です。でも、これはすでに2006年の話で、もう20年も前の話です。宇宙の本はどこで分けるか非常に悩ましいところなのですが、ブラックホールで分けると2018年以前の本はかなり使えなくなってしまいます。ブラックホールに関しては、例えばブラックホールの概念を最初に提唱した人、それにブラックホールという名前を付けた人、この二つは残ります。ブラックホールはあるということが確定してしまったので、ブラックホールがあるかないかの議論の部分は全部いらなくなるということになります。少なくとも学校図書館では必要ないのです。あると子どもたちが間違えて覚えてしまいます。学校図書館と公共図書館の棚は、一般図書館でデータを最先端に更新していかないといけない図書館です。否定された学説は追い出さないとなりません。ただし、大学図書館や県立図書館クラスの図書館は資料を持っておきます。なぜかという否定された学説を研究しに来る人もいるからです。

この20年の間は、自然科学の本がたくさん作られました。一方、文学の本は、1990年代から2008年までは、ファンタジーが主流でした。ファンタジーは現実がどう変わろうと関係なく持続することができます。打撃を受けたのはミステリーでした。トリックが成立しなくなったのです。ミステリーとファンタジーは相関関係にあるので、ファンタジーが浮かぶとミステリーが沈み、ミステリーが浮かぶ時にはファンタジーが沈むのです。2008年にファンタジーは売れなくなりました。なぜならスマホが生まれ、たまたまその年の同じ月に『ハリー・ポッター』の第7巻が出版され、橋は焼いて落とされました。もう前の世界には戻れません。その後は、一番売れないジャンルは、ファンタジーです。(ただし、「なろう系」は除く)

2005年あたりからミステリーが復活してくる兆しがありました。アメリカで、ジェリー・ブラッカイマー(プロデューサー)が『CSI(シーエスアイ:科学捜査班)』シリーズを始めました。『CSI』はミステリーです。これが浮上してくるということは、そろそろファンタジーは終わるなど思っていたら、日本でも『相棒』がある時から急に人気になりました。いよいよファンタジーは終わりだなと思っていたら2008年、ハリー・ポッターショックが来ました。7月にスマホがたいそう売れて、9月に始まったトレンド

ドラマでは主人公たちのケータイがスマホに変わっていました。『相棒』の右京さんだけがガラケー（携帯電話）でした。ということは、右京さんがガラケーから、いつスマホに変えたかというのをチェックしたら、多分そこでまた社会の変化が一つ起きていたのだということが分かると思います。トレンドドラマを作っている人たちはそういうことに対しては敏感です。ドラマの中で出てくる主人公が着ている服、さりげなく置いてある小物やぬいぐるみ、そういうものにはすべて意味があります。

2008年に生まれた人たちは現在16歳、高校1年です。ということは高校1年と高校2年の間に文化的に亀裂が入ったということです。そして、これを後押しするように今年の高校1年生から教科書が変わりました。ということは、今の高校1年生が習っていることを高校3年生は知らないということになります。

子どもと読書の話をするときには、ポイントは二つです。今の本がどういうふうになっているのかと同時に、子どもたちもどうなっているのか、ということを知らないと、話はうまくマッチしません。子どもたちの実情を知らないで、「これは良い本なのだから読みなさい」と言っても読まれるわけではないのです。なぜかという、それはもう子どもたちに必要がないからです。

かつて、『赤毛のアン』が日本で爆発的に売れた時代がありました。日本が国を挙げて愛情不足になったときに『赤毛のアン』を読んで、自分も、もしかしたら愛してもらえるかもしれないという希望を持つことができました。でも、今の子どもたちは、マッシュもマリラもどこにもいない、自分はこの方法では助からないということを知っています。ですから、今『赤毛のアン』は読まれません。全体の3%ぐらいのごく少数ですが、物語ならなんでも読むという人たちはいます。彼らは貪欲に何でも飲み込みますので、古い本でも新しい本でもお構いなく、なんでも読みます。というわけで、文化は細々と継承はされていきますが、全体的にはもう読まれません。そうやって文化が断裂したときに、次の文化が立ち上がってくる。次の物語が立ち上がってくるのに、5、6年はかかります。

日本は1991年にバブルがはじけました。その前に天皇陛下が亡くなり、手塚治虫が亡くなり、そこで一度文化が変わりました。今、ヤングアダルト作家といわれている人達は大体がこの89年から94年の間にデビューしてきた人達です。森絵都と佐藤多佳子、その一時代前に氷室冴子があります。93年に出版された森絵都の『宇宙のみなしご』は、それほど売れなかった。読者が育っていなかったからです。森絵都が爆発的にヒットしたのは、97年の『カラフル』です。『カラフル』はたいそう易しい話だった。何が言いたいのかがとてもよく分かる。そして、その当時の子どもたちの心情にぴったりマッチしました。でも、今『カラフル』が読まれるかという、読まれません。今、物語が読める時期の子どもたち（小学生）に私がどちらかを出すかといったら、『宇宙のみなしご』の方だと思います。今ならあれは理解ができるし『カラフル』の問題は、すでに答えが出てしまっているのも面白くない。そういう本を差し出せるのは、なんでも読むという子どもだけです。私はそういう子どもたちは全体の3%と踏んでいきます。つまり100人いたら3人ということです。残りの97人はそこまで物語が好きではない子どもたちです。

作家が、ある一つのジャンルが書けるということは、その時代を表現することができたということ

す。ということは、その時代が終わると同時にそのジャンルも終わります。なぜかという、次の時代はそのノウハウでは作れないからです。でも人間は、自分が苦しいことを何とか言いたいと思う。なので、その次の世代に合うように、こういう方法だったら伝わるということを見つけるまでに大抵5、6年かかる。ということは2008年の次に出てくるのは、2013年です。その間の5年間は不毛の時代で、子どもたちは大人の世界から読めるものを引っばってきて繋いで、しのぎます。

その2013年に出てきたのが何かというと、『転生したらスライムだった』です。略称『転スラ』。この十年間新刊が出れば必ず一位を取りますね。また、大人たちにとっては、『転スラ』は、それまで書かれていたライトノベルとほとんど変わらなく見えたでしょう。読んでみなければ区別はつきません。2010年前後から中学生たちに「かん子さん、もうラノベは買わなくていいから」と言われるようになりました。「だって、現実でこんなにろくでもないやつが、あっちの世界に行ったからってヒーローになれるわけないじゃん。そんなおっさんの妄想に俺たちはつき合ってるんねえ」と、言われたんです。というわけで3年ぐらいはラノベを買わない時期がありました。ただある時、いきなり中学生に「かん子さん、『転スラ』買って！」と言われたのです。ということは、『転スラ』は、大人からは同じようなライトノベルに見えるけれども中身は違うのだらうということです。それからの10年間は、『転スラ』の快進撃でした。このジャンルのことを「なろう系」と呼びます。なぜかという「小説家になろう」というサイトに投稿してきた中から出てくる作品が大部分だからです。作品を投稿するのは素人です。素人が何十万という作品を書く。そこからごくわずかですが、商品化される作品が出てきます。1990年代まで、小説はプロの書くものでした。ところが、2000年前後の「ケータイ小説」から、小説は素人でも書いていいもの、になったのです。「ケータイ小説」も「なろう系」も素人が作り上げたジャンルです。なぜかという、プロが自分たちの読みたい本を書いてくれなかったからです。

「時代小説」は、こういう時代の変遷の影響を受けません。もともとファンタジーです。存在しない世界です。なので、時代小説は残りました。それから「ヤングアダルト小説」も残っていますが、今このヤングアダルトと呼ばれている小説群を現実の10代が読んでいるかという、なんでも読む3%以外はほぼ読んでいません。主に読んでいるのは30代、40代、50代、60代です。

人間は、自分が悩んだり、苦しんだりしていることに対して、答えを書いているものを楽しいと思います。ということは、その小説の主人公が悩んでいることが自分の悩みではないときには、それは自分と関係のない話になってしまいます。今のヤングアダルトと小説の主人公の悩みは、現実の10代の子どもたちが考えたり、苦しんだりしていることと遊離してしまう。だから、読んでも面白くないと感じるのです。10代の子どもたちが悩んでいないわけではないです。彼らの悩みにぴったりと呼応するような内容を書くことができれば、それは10代の子どもが読む本になるでしょう。というふうに、書かれる物語の中身も変わってきてしまいました。

それとここからは年齢が下の人の話になりますが、もう一つ、子どもたち自身も変わりました。子どもの世界で亀裂が入るか、どこで分かるかという、小学校1年生の学校図書館で分かります。なぜかという、去年まで売っていた本がいきなり読まれなくなるからです。その亀裂が入った子どもたち（現在16歳）が、小学1年生だった時『レインボーマジック』が止まりました。かわいらしい妖精シリー

ズです。前の年の秋まで80冊、書架に1冊も残らないほど動いていたのに、4月になったら全冊書架にそろった。「何か始まった！」と思うじゃないですか。特に女の子向けの物語はそれが露骨です。本当に恐ろしいほど、ぴたっと止まります。ぴくりとも動かなくなります。そうして『レインボーマジック』が止まったということは、『マジックツリーハウス』も多分この後4、5年かかって収束していくんだらうというふうに予測ができます。これは図書館にとっては恐怖です。なぜかという、そのときには、ほぼ代わりに出せる商品がまだ存在していないからです。この本が読まれなくなったら次に何を出せばいいの？ということになります。

でも、そのときにふと思ったのです。1年生になったからといって、子どもがすぐに変わるわけではないだろう、と。この変化はもっと前から起きているはず。そう思って、私は幼稚園と保育園を見に行くようになりました。その結果、分かったことは、今の子どもたちは、生まれた瞬間から違うということです。特にここ5年間の変化は素晴らしい。毎年、4月に1年生が来る度に、^{きょうがく}驚愕という状態が続いているのですが、その結果、どうなったかという、今『かいけつゾロリ』を読んでいるのは、2歳半です。ゾロリは2歳半が1人で読む本になりました。日本語は、一語一音対応なので、一遍読んでもらって、覚えてしまえば、その後は自分で読むことができます。最初「2歳半が1人で読む本になりました。」と、公共図書館の児童担当の職員に言われた時には、そんなばかなと思ったのですが、本当にそうでした。ということは、もう小学校ではほぼ読まれないということです。この3年の間に、『かいけつゾロリ』と『ほねほねザウルス』は、そろそろと撤退していくでしょう。多分、まだ「うちでは、要ります」という学校が全体の1割か2割ではないかと思います。「もうちは要りません。買えません。子どもたちに買ってくれと言われません。」という学校の方が圧倒的に多いはず。

小学校の司書なら、この10年の間に『ティラノサウルス』と『働く車』と『クイズなぞなぞ迷路』と『カブトムシ』が売れなくなったということは、皮膚感覚として分かると思います。かつては3歳まで『アンパンマン』でもたせることができました。でも、今『アンパンマン』は、ぎりぎり1歳から1歳2ヶ月ぐらいまでです。初めからアンパンマンに入らない赤ちゃんもたくさんいます。すぐにプリキュアと戦隊ものに行き、それから4歳になるまでに抜けます。今、恐竜は大体2歳半で入って、4歳になる前に抜けます。カブトムシも同じです。では、4歳になったらどこに行くのかという、元素図鑑とブラックホールです。100%ではないですよ。でも、今までは4歳児で元素図鑑をみながら子どもはいなかった。でも、今はかなり多くの子どもたちがそこに行きます。そして脅威の記憶力で元素記号を全部覚えます。あの年頃の人たちは、面白いと思うだけで覚えることができます。覚えようと思わなくてもです。

(図鑑の紹介)これは、アメリカの Smithsonian 博物館が100周年を記念して作った超ハイレベルの図鑑です。『地球生物学大図鑑』といいます。でも、値段は1万円しかしません。表紙は浮彫のインクになっています。技術が発達したので、熱を当てると浮き上がってくるインクというのがあるのです。これは、触るとでこぼこしています。3年ぐらい前の4月に、小学1年生が図書館にやってきて、図鑑が欲しいというので、『図鑑NEO』を出したところ、「これじゃなくて！」と言うので、『地球生物学大図鑑』を出したところ、「これ、これ！」と言って、借りていきました。その時に、「『図鑑NEO』はどうしてだめな

の？」と聞いたら、「もう2歳のときに読んだ」と言われました。つまり、おじいちゃんとおばあちゃんは喜んで本を買ってくれるわけです。『図鑑NEO』は全国どこでも売っていますから、それはもう暗記するほど読んでしまった、2歳の時に。せっかく小学校に上がったのだから、もっと上の本が欲しいと思うのは当然です。

今日、児童書出版社が作る図鑑は、ほぼ3、4歳から下の子どもたち向きです。小学生には物足りなすぎる。それで、私はこの本は、1歳のお誕生日が来たらあげることにしています。今1歳の赤ちゃんは、この本を見ます。なぜかという、綺麗だからです。

マーカス・チャウンの『太陽系大図鑑』は、太陽系について小惑星レベルまで非常に詳しく説明してあります。太陽系に関してはこれ1冊あればOKというレベルです。これを借りて帰るのは小学1年生です。この後に『銀河大図鑑』と『深宇宙大図鑑』があります。3冊を並べておくと、2年前まではこのマーカス・チャウンしか出ませんでした。でも去年からは、この『太陽系大図鑑』があまり借りられなくなり、『銀河大図鑑』と『深宇宙大図鑑』の方がたくさん借りられます。ということは、「もう太陽系に関しては、僕たちは知識を持っているよ」ということだと思います。

というわけで、今の小学校低学年というか1年生にサービスするのはとても大変ですね。こっちもかなりの知識を持っていないと、「この人に話しても無駄」と思われて、切られてしまいます。

ある時、1年生が「すごく困ることがあるんです！」と、すごく真剣な顔をしてやって来たので、聞いてみたら、「市立の中央図書館に行くと、まだ『冥王星が惑星』って書いてある本が置いてあるんですよ」って言うのです。「それは大変だね。でも大丈夫。この図書館からは全部廃棄してあります。」「そうなんですか。よかった！」と、言われました。その時、「は？ 冥王星が惑星じゃないって、何？」とか何かでも言ってごらんさい、「ああ、この人には何を言っても無駄」と、もうその後は何も言ってこなくなるだろうと思うのです。

というわけで、15年前ぐらいから文系のためのサイエンスカフェを始めました。各ジャンルについてそこそこ知識がないと、まず本を捨てられない。小学校だったらこのレベルの本は持っていていいのか、いけないのかということ判断するためには、それなりに基礎知識がいるわけです。多分それまでの児童図書館員は、自然科学のことなど何も考えていなかったと思います。物語だけ読んでいた。絵本だけ読んでいた。でも、それではやっていけない時代というのが来てしまったわけです。

普通のサイエンスカフェに行くと、基本的な素養がないから話がハイレベルすぎてついていけないので、キュレーターに自分たちがどのぐらい科学について知らないのかということ切々と説明します。そして、このことについて説明をしてくれという会を開いたわけです。まず、私たちが何にも知らないということを知ってもらうのが大変で、サイエンスカフェを十数年続けていますが、「え？そこら説明するんですか？」って、毎回言われています。毎年ノーベル賞を誰かがもらおうと、そのことについて説明してもらうという内容なのですが、ある時「ヒッグス粒子」が見つかったというニュースがありましたよね。文系には全く分からない世界です。というわけで、私の出したお題は、「ヒッグス粒子が見つかって、何でみんな泣いて喜んでいるのですか？」でした。その時の説明というのが、「今の近代物理学というのは、四つの柱でできています。一つが重力、一つが弱い力、一つが強い力、そして、4番目

がヒッグス粒子です。前の三つに関しては、もう証明が終わっていますので、ヒッグス粒子がないということになると、僕たちのこれまでの100年間の努力は全部水の泡になります。だから、ヒッグス粒子が見つかって、あんなに喜んでるんですよ」ということでした。なるほど、すごくよく分かりました。でも、ヒッグス粒子が何なのかということは全く分かりません。で、そのあと全員、「もういい！」と言ってしまいました(笑)。キュレーターの彼はニコニコ笑って、「でもね、皆さん。ヒッグス粒子は“粒子”と名前が付けられていますが、本当は“波”なんですよ」と言ったのですが……。

図書館に勤めている、本に係わっている私たちの目的は「廃棄できるようになること」です。この本はもう捨ててもいいものか、捨てたらだめなのかが知りたい。各ジャンル、植物学に関して、菌類に関して、天文学に関して地学に関して……。本当に大変なことです。だから、ほとんどの公共図書館はそういうこと(廃棄)をしていません。だから、児童書には古くて使えなくなった自然科学の本が大量にあり、そこには新しい本が入っていません。そうしたら、お客さんは来ないですよ。そして悲しいことに、今使える、面白い魅力的な科学の本というのは、ほぼ大人用の本です。だから、大人の本を買ってきて児童書に入れないと、その本棚は、ピカピカしません。

学校図書館はまだましなのです。大人用の本を買っても、書架に並べれば、小学生の棚になります。でも公共図書館は1冊図鑑を買ったら、ほとんどがレファレンスルームに入ってしまう。特に5000円、8000円、1万円という本は、「貸し出ししませんコーナー(禁帯出)」に並んでしまうのです。つまり、魅力的な図鑑があっても、4歳児は見ることはできないのです。この状況を何とかしたいと思って、広島県立図書館で「子どもサイエンスコーナー」を作り、そこに大量の大人用のかっこいい図鑑を入れました。

ピカピカする本棚を作るコツは、良い本を入れるということはみんな知っています。でもその次には、つまらない本を入れないこと、なのです。良い本をいくら入れても、つまらない本が大量にあると、やっぱりその本棚はピカピカしません。例えば、花壇を綺麗に見せるには、枯れた花は摘まなくてはいけないのです。綺麗に咲いているのがたった三つだけだとしても、周りの枯れた花が全部なくなれば、綺麗に見えます。枯れた花の方が咲いている花の数より多かったら、そこは綺麗に見えないのです。というわけで、極力つまらない本を抜き、かっこいい本を入れました。

そこまでお金はかけられませんが、普通の小学校でも20万円ほど使えば、そこそこのことはできます。でも、それを実行するには、科学の知識があり、本の知識がないとできません。知らない本を買うのは難しいです。そもそもそれが必要だとわかっていないと、購入できません。マーカス・チャウンは、もともと天文学に興味のある人向けです。この『太陽系図鑑』みたいなものや『太陽系探検』みたいなものは、天文学にあまり興味がない人にも「へえ！」と思ってもらえる本です。つまり、初級編、中級編、上級編の本が必要なのです。

(『太陽系探検』の1ページ紹介)これは『火星探検機』です。青いところは太陽光パネル。この2機は太陽光線を使って自動で動きます。一機は早々壊れましたが、もう1機は、12、3年保ちましたね。で

も、とうとう溝に入り込んでしまって、今は身動きができなくなっています。新しいものを送ったのだったかな。このページはアポロです。1969年です。会場の皆さんはおいくつでしたでしょうか。アポロが着陸した時のことを覚えていますか。今、小学校の1年生にこの本をブックトークすると多分半分ぐらいがアポロを知らない。1969年、人類は初めて地球以外の天体に降り立ちました。「皆さんのお父さんやお母さんをおいくつでしたか？」と聞くと、「まだ生まれてない」と言われます。つまり、これは今の小学生にとっては、おじいちゃんとおばあちゃんの時代の物語なのです。今の子どもにはロボットがいるのは当たり前。宇宙空間に人がいるのも当たりの時代なのです。

このページはあまり知っている人がいない、1994年にシューメーカー・レヴィ第9彗星が木星にぶつかって、バラバラになって消えた話です。世界中の天体望遠鏡がこれを追いました。彗星が惑星にぶつかる瞬間を人類が初めて見た瞬間だからです。その結果、なぜこれが有名になったかという、そのときのエネルギー量を計算したら、地球に隕石が落ちたときに恐竜が絶滅したのは無理もないということになり、これが元になって、恐竜が絶滅したのは、巨大な隕石がぶつかったせいであるという隕石インパクト説が承認されたからです。だから、1997年までの本には、「恐竜が絶滅したのは隕石がぶつかったからであるという説が“最有力である”」と書いてありますが、2000年の本には、「恐竜が絶滅したのは、“隕石がぶつかったせいである”」と書いてあります。記述が変わったのはこのちいさな隕石が木星にぶつかったせいなのです。この話はこの本には載っていません。恐竜の本に載っていますが、そう説明すると子どもたちは目を輝かせて聞き入ります。

私は、学校図書館と司書の仕事というのは「子どもたちの頭にアンテナを立てること」だと思います。アンテナが立っていないと全部情報は流れていってしまいますが、いっぺんアンテナが立つと、テレビのニュースで流れたときにキャッチできるようになりますよね。今の子どもたちは調べようと思ったらネットですぐ調べることができると思っています。だから、キーワードを知れば自分でその先は調べることができます。「へえ！ そうなんだ」という本を紹介し、読んでやり、見せ、説明することで、子どもたちの頭にアンテナを立ててやりたいと思うのです。そうしたら、例えばニュースで耳にしたときに、「あれ？ これ、先生が言った話だ！」と思うのではないのでしょうか。

最後に文学に話を戻しますが、今、新しい文学はほとんど出てこないのですが、それでも子どもたちは何か読みたいと思い、センスのいい敏感な中学生たちが見つけたのが、次の2シリーズです。これは、通称「文スト文庫」と言われているシリーズですが、文豪の本に「文豪ストレイドッグス」という漫画のイラストをカバーにしているものです。平成も飛び越え、昭和も飛び越え、大正も飛び越え、いきなり明治時代まで戻りました。今の中学生が読むのは、漱石、太宰、芥川です。中身は全く変わりません。でも、このカバーがつくと、中学校では飛ぶように売れます。

これは立東舎^{りっとうしゃ}の『乙女の本棚』というシリーズ名なのですが、少女小説ではありません。中身は文豪の短編です。この短編にページごとにカラフルな綺麗なイラストを入れています。この2シリーズは、今の中学校では必須です。全部で15冊ぐらいしかありませんが、本棚に入れれば、ほぼ全部貸出さ

れるような状態です。今、このシリーズは小学校5, 6年生も平気で借りていくようになりました。ついこの前、小学1年生の男子が『人間失格』を借りていきました。

今の低学年、1年生、2年生は活字の本にカムバックしてきています。この世代は、デジタルネイティブです。ネットの果てが分かっているのだと思います。一昨年、小学1年生の男子が4月に入ってくるなり、「ネットは答えをしてくれるけども、考え方は教えてくれない。本は考え方を教えてくれるから僕は図書館にきました」と言いました。今の子どもたちはネットの情報はたくさんあるようで本当はないということに気付いています。本1冊に入っている情報をネットで見ようと思ったら画面が小さいから、何十時間もかかってしまう。ネットは自分の知りたいことをピンポイントで知るには格好の素晴らしい道具です。でも、俯瞰では使えないということに気が付いているのです。

本屋さんに一歩入った瞬間に入ってくる情報量とネットの情報量は桁違いに違います。だから、低学年は活字に戻ってきている。ネットがあれば十分だと思っているのは30代と40代の大人たちのほうです。

でも、平成も大正も全部飛び越えて、まさか漱石まで戻るとは思っていませんでしたが、実は、漱石以前には遡れないのです。なぜかという文体が違うからです。『たけくらべ』は練習しないと読めるようになりません。どこまで進んだらマル(句点)が出てくるの？ という文章は、訓練されないと読めるようになりません。自分が習い覚えたハウツーで読むことができないから漱石以前に遡ることは難しいのです。日本では近代小説、夏目漱石までは遡れます。芥川と太宰は永遠のヤングアダルトなので読めますが、森鷗外や紅葉(尾崎紅葉)は、古い価値観が邪魔して読めないのです。

『ドルフィン・エクスプレス』は、今年小型のかわつこいい本に生まれ変わりました。この本の主人公は猫なのですが、10代の男の子で、親がいません。1人で必死になって海の宅配便をして生きています。少女小説というのは、女の子が主人公で、その子が成長していく過程を書いたものです。少女小説は、『イチゴ村の物語』と、それから『たまごの魔法屋トア』の人気が出始めました。『スパイファミリー』を入れると、少女小説の棚ができます。

一方、男子の方は最近『逃げ上手の若君』(歴史物)が人気になりました。もちろん『鬼滅の刃』^{きめつ やいば}と『呪術廻戦』^{じゅじゅつかいせん}を入れれば、小学生男子も読めるものがあります。

また、『ミステリーという勿れ』、これは今年秋に映画になります。この作品は小学生から60代、70代までもが読んでいます。『薬屋のひとりごと』もそうですね。なろう系の特徴は、年齢制限がないことです。今の時代、小説の年齢制限がなくなって、同じ本をみんなが読んでいます。だから、小学校と中学校と高校と図書館に同じ本が入られます。

この『バルサイユの庭園』は、穴から覗くようになっていきます。19世紀の大傑作、仕掛け本です。私は小学校にはこういった特殊な仕掛けの本を1冊ずつは入れるようにしたいと思っています。なぜかという、子どもたちはそれを見て「そうか！」と思ったら、それを超えるものを作ろうとするからです。でも、そのためにはヒントが必要ですよね。だから、触れる本、展示の本、伸びる本など、いろいろなタイプのものを見つけたら、それはなるべく図書館に入れるようにしています。いろんな形で子どもの頭を

刺激してやりたいですし、必要な情報を入れてやりたいと思っています。学校図書館というところは、子どもの勉強を支え、生活を支え、部活を支えなくてはならないと思います。学校図書館は教科書に載っている本はもちろん入れます。でも、教科書に載っていないものを補填^{ほてん}するのも仕事だと思います。「今日お母さん熱出して寝込んでいるからさ。俺にもできる夕飯の本ない？」という小学5年生男子に答えてあげられる学校図書館でいたいと思います。

最後に図書館とは何か。図書館は小説を読みに行くところではなく、必要な情報を手に入れに行くところ。ということは、学校図書館だったら、その学校の子どもたちと、その子どもの面倒を見ている先生が必要な資料を入れないといけないのです。図書館は、良い本を入れるところではなく、必要な情報を集め、プールし、提供するところ。ということは、必要でないものはいらないということになります。だから、図書館を作る時には「誰が使うのか」を明確にしなければいけません。全世界の本をすべて集めることはできないから、「うちの図書館は、ここからここまで」というふうに範囲を決めないと資料を収集することができません。それには、お客様の実態を知らなかったらできないということになります。今、自分の目の前にいる小学生は30年前の小学生とは違います。今の時代の子どもたちは、一体どんな情報が必要で、何が欲しいと思っているのでしょうか。まず、顕在欲求は埋めます。欲しいと分かっているものは提供する。そして、本人がまだ知らないから今はまだ欲しいと思っていないけれど、実際に見たら、「こういうのが欲しかったんだ」と言ってくれるものを提供しなければならないと思います。

世界は変わります。去年の12月にChatGPTができて、これでまた世界は大きく動きます。今、「ChatGPTを使うな、使うな」と言っている人が結構いますが、それは意味がない。一度始まってしまったものを誰が止められるでしょうか？ それを使うことが前提で使って、もし良くないことが起きるならば、どうすればよいかということを考えないといけない。ChatGPTは確かに論文を書いてくれます。ChatGPTが作ってくれた文章を読むだけでもなんぼか勉強になります。しかし、ChatGPTは、データの一つに過ぎないので、それをそのまま提出したらだめだということを子どもたちに教えるべきではないでしょうか。

というわけで、ChatGPTは、新しい時代の始まりです。1995年のWindowsと同じか、もしくはもう少し大きい変化になる可能性があります。ということは、今年生まれた子どもたちからまた文化が変わるということです。その子どもたちがあと6年経つと小学校に入学します。そのときに学校はどう対応すればいいのか、どんな情報が必要なのか、どの本を提供すればいいのか、考えなくてはなりません。人間には変わる部分と変わらない部分があります。変わらない部分にも対応しなければいけないし、変わる部分にも対応しないといけないのです。

というわけで、子どもは変わりました。だから、本も変わらざるを得ないのです。なので、玉突き状態で図書館も変わらなくてはならないのだということがわかっただけならば、今日はオーライです。では、これで終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。